

7. 特別支援教育への期待と不安

～一保護者の思い；個別の教育支援計画を私たちはどう受けとめ、 そしてどう未来へつなげていくのか～

私には、重複障がいのある12才になる息子がおります。息子の子育てを通じて、足りないと思うこと、そして必要だと感じたことを自分なりに受けとめ、そのことを周りに伝え、かたちにしてきたことが、現在の自分の立場になっていると思っています。この12年の間に、自分がそれまで生きてきた人生の中では経験しなかったようなことを体験し、彼を通じて知り合った多くの人たちの力を借りて、今毎日を送っています。

息子の誕生から始まった医療との関わり、そして福祉の窓口へ出向くようになり、地域療育センターでの療育がスタートしました。子育ても初めてながら、“障がい”との出会いも初めてです。“当事者”と言われる立場となって関わる人たちとの出会いは、まさに日々一喜一憂という感じでした。専門家と言われる人に“お子さんの脳には異常があります”と、4ヶ月健診の会場で、多くの親子連れの中で最初に告げられた悪夢のような時間、福祉の窓口で“障がい児はこちらへ”と違う窓口へ案内されたときの衝撃、保育所の相談で“障がいがあるんです”と伝えた瞬間に、申込書が入っている引き出しを目の前で閉められた経験、何十件と電話をかけても入園を断られ続けた幼稚園選び、初めての就学説明会で“障がいのあるお子さんは養護学校へ行くと法律で決められています”と言われたことなど、どんどん狭い世界に閉じ込められていくような気持ちになっていったことを思い出します。その中で、特別に設定された暖かい環境である“療育”の世界は、初めて私たち家族を認めてくれる人たちとの出会いに恵まれ、本当に居心地のよい場所となりました。障がいがあっても当然、私たち家族の思いを受けとめてくれる人たちとの4年間は、逆にそこを巣立って“教育”と言う荒波に出て行く気持ちを萎えさせてしまうほどでした。しかし私はこのままこういった環境で暮らしていくことは、逆に子どもの住む世界を狭めていってしまうのではないかとこのことを危惧したのです。特別に設定された環境で、特別な支援のもとで生活することに慣れてしまったら、それ以外の場所では暮らしていけなくなるのではないかとこの不安を持ちました。息子は生涯にわたって誰かの支援を必ず必要とする子どもです。こういった支援でないといけないとか、この人の支援でないといけないとか、この人でないとどこかへ行けないとか、この場所でないと行かれないといった限定された事情を作ってしまうよりも、誰とでもどこへでも行かれる人、どんな支援でも受け入れられる人、そして何より自分の要求を伝えられる人になってほしいと願ったのです。その気づきがあってから、私は療育でも教育でも福祉サービスを受けるときでも、このことを常に伝えてきました。親として子どもの成長にとって、何が大切かを伝える機会は比較的多いと思います。その都度、今行われていることは、そしてこれから行われようとしていることは、家族がのぞむことに合っているかどうかを検証するというスタイルで、その時の最善策について知恵を出し合い、すすめてきたように感じています。

その一方で今から10年ほど前に、ひとつの会社を立ち上げました。主な仕事は「障がいのあるお子さんの活動を支援する」ことです。自分の経験から、家族だけで少ない情報を集め、判断し、すでに出来ている福祉や教育の流れにそった生き方を、満足できないながらも選択をしていることに疑問をもち、その子らしく、自分たちの暮らす街で、アタリマエに生きることを応援する会社にしたいと思いました。お子さんの成長を共に楽しみ、いっしょに考えていきましょうというコンセプトで、診断・治療・指導・訓練はいっさいせず、すべて訪問という形式でお子さんの住む街に出掛け、マンツーマンでのサービスを行っています。

主に放課後や週末、長期休暇などに、ご家族以外の第三者という立場で、お子さんといっしょに楽しい時間を過ごし、お子さんの好きなことなら何でもおつきあひするのが仕事です。「何でも屋さん」の

ような存在になりたいと願い、少ないスタッフ一丸となって活動を続けています。また9割以上の利用者の方々が学齢児ということもあり、学校に関する相談がとて多いというのも特徴だと思います。お住まいの地域はA市を中心に、B県、C県、D県と広域にわたっていますが、どこに暮らしていても、充実した学校生活を送りたいという願いは、変わることはありません。どちらかという、暮らしている地域の決まりごと（制度）にぶつかって頭を悩ませているか、お子さん自身のことや、ご家族やご本人の考えを理解できない人たちとの毎日に疲れてしまっている方が多いという印象があります。そういった方々からのご相談に、同じ保護者の立場としてお話を聞き、共感しつつ、いろいろな解決策についていっしょに考えるといった方法でお話をしてまいりました。何年かお話をお伺いしているうちに、どうしても直接学校に出向き、私どもが直接お子さんの学校生活をお手伝いするケースが増えてきました。そこで2001年から、学校での支援を中心に行う事業を始めました。そこで実際に見聞きした現場での様子や、学校の先生方とお話をする中で感じることも多くありました。机上で考えるほど、そんなに簡単なものではないこともたくさん実感しています。

そういった自分たち家族の経験や、短いですが法人として10年間にわたり、障がいのあるお子さんたちの様々なお手伝いを行ってきた実績、そしてご家族から伺った生の声をもとに、この特別支援教育をすすめていく上で、どのように感じているかを一保護者の視点、そして一支援者の視点でお話したいと思います。

1) 特別支援教育を行うための土壌づくり

(1) 今ある資源で行うことの限界

特別支援教育をすすめる上で、大幅な予算増が見込めない中、現状の人的資源、物的資源でより効果的に成果をあげることが掲げられている自治体も多いのではないのでしょうか。私は、この特別支援教育の取り組みが単純な教職員の負担増とならないような配慮が必要だと考えます。私が見た範囲ですが、実際の教育現場では、指導力のある教員ほど様々な仕事を抱えているケースが多いと思います。またどの学校においても資源は一律ではとらえづらいもので、そこにいる子どもたち一人一人の教育的ニーズ、教職員の力量、地域や保護者の理解などによっても違いがでることが予想されます。一人一人の子どもの様子や学校や学級、教室の運営に応じた柔軟な対応が必要だと感じているのですが、そこまで考慮された上で、個別の教育支援計画を行えるのかどうか、課題になるのではないかと思います。

(2) 教職員体制の再検討

現在の学校現場でも人手の足りない学級は多く見受けられます。そして今回の特別支援教育の対象となるお子さんは、A市でも15,000人という報告もあり、この数字だけをみても、どうやって現在の人的配置で十分な対応ができるのか予想もつきません。個別の教育支援計画においても、お子さんを見ずにマニュアルを見ながら「つくらねばならない」資料になってしまうことが懸念されます。時間をかけることが大切な特別支援教育において、それを実施する体制が整っていない中ですすめていくことは難しいと思います。たとえば個別支援学級在籍のお子さんも、普通級への交流の機会は、先生の空き状況によって考えられ、本人の希望や本人にとって必要なタイミングで実施されていないといった話も聞いています。特別支援教育で重要なことは、担任が一人一人の子どもをしっかりと向き合い、話し合う時間を確保し、保護者とも情報を共有しながら、個に応じた指導を充実することだと思います。書類だけが整備されても、結局そこがなくては何もすすまないと思うのです。計画を推進していくためには、教職員体制の再検討が必要だと思います。

（３）40人学級の限界

普通学校において、今でも教室内に40人の子どもがいる場合、目が行き届かず、指導が手一杯という状況があります。これは現場の教職員からの声です。30人と40人では、単純に一人一人にかけられる時間も変わります。40人学級のままで、どこまで普通学級在籍の特別な教育的ニーズを持つ子どもたちの対応ができるのかがとても不安です。個別の教育支援計画をつくること自体、難しいのではないのでしょうか。健常とよばれる子どもたちの抱える問題も、決して小さくはないと考えます。

（４）障がい理解の推進（校長・教員・地域・保護者・児童）

特別支援教育が始まった後も、校長先生をはじめ現場の教職員の中には一部「それは上で決まったことだから」「実際の現場では無理がある」という声が聞かれます。最近も「人がいない、お金がない」ことを理由に、個別指導の難しさ、現状の体制では無理ということを私自身が学校側から告げられました。特別支援教育は、障がいのある子どもにだけ目を向けていてもすすまず、周囲の理解をすすめるための環境づくりが必要だと思います。校長先生や教職員の先生方をはじめ、地域や保護者、そして共に学ぶ子どもたちが特別支援教育の必要性を理解し、共に支えていく意思を持ち、決して一部の人だけの問題にしないことが大切だと思います。また学校をあげて、お便りなどの機会に、校長のことはや個別支援級に通うお子さんをお持ちの保護者の方からの理解をすすめるような内容を掲載しているケースもあるようです。こういった「学校をあげて」といった、みんなで取り組んでいるんだという姿勢を見せることは大変重要なことだと思います。

（５）教育のデリバリーシステム

「本人の思い」が優先され、一人一人の子どもに合った教育が行われるためには、子ども本人を取り出したり、注視するよりも、周りの環境を整備することによって解決することも多いということに気づいてほしいと思います。支援が必要なのは児童本人だけとは限りません。学級担任への支援があることで解決するケースも多いはずです。できれば子どもをあちらこちらに動かさず、今いるところで教育が受けられるような配慮と工夫が必要だと感じています。

（６）子どもの立場に立つ姿勢

登校から下校までの約7時間余りの時間だけを教育だと位置付けない姿勢が大切だと思います。一日24時間、一年365日を考えると、実際に学校にいる時間は一部にしか過ぎません。特別支援教育の大切なところは、その一部をすべてとみるのではなく、学校は暮らしの中の一部であるという認識のもとに、子どもと向き合うことだと考えます。私は、学校の門を出てしまったら、また極端に言えば教室の席を離れたら、後は私たちの範疇ではないという学校が多いことを知っています。ある学校の先生が「保護者が学校に子どもを丸投げしている」とおっしゃったそうです。私たち保護者はその24時間365日全体に責任を持ち、子どもを育てています。ましてや保護者は教育の専門家ではありません。教育が暮らしの中に位置づいてこそ、子どもの力となることを忘れないでほしいと思います。

また特別支援教育を考えたときに、放課後、週末、長期休暇などへの視点も含めてほしいと思います。盲・ろう・養護学校に通う子どもたちの中には、長時間スクールバスに乗って学校に通うこととなり、本人の住んでいる地域とは離れたところで学校生活を送っている子どもたちも多くいると思います。そのため地域との関わりはとても薄くなっており、自分の暮らす街でこういった活動ができるかも計画の中に必要だと思います。実際に街で暮らす視点にたち、その子自身が生活の幅を広げられるような後押しが教育にも必要だと思います。また、横浜市のプランでは、障がいのある子どもが心豊かに生活し、安心して学校生活を送ることを「保護者」の問題としてとらえているところがあります。地域の

学校に通う場合、また余暇活動なども、保護者が行うことが前提となっていることに疑問を感じます。教育がこういった事柄を「本人」を支援する観点でとらえ、教育の中でしっかりこの考えを育んでいかなければ、スムーズに社会へ移行していくことは不可能だと考えます。保護者は前述でも述べたとおり、実際に24時間365日の多くの部分を担っています。言い換えれば24時間365日すべてにわたって保護者の責任があるわけです。日々の学校生活や余暇活動以外にも、もっと大きな視点で子どもの将来をとらえていく必要が保護者にはあります。保護者が保護者の役割をしっかり行うためにも、今以上に「本人支援」の観点での教育をしっかり行ってほしいと思います。

（７）他機関との連携の不足

A市では、公立小・中学校すべてに特別支援教育コーディネーターが配置されました。しかし専任ではなく、副校長、教務主任、個別支援学級の教員等に肩書きが増えたという認識の方も多いと思います。また校内での認知度も低すぎます。ある療育センターのケースワーカーさんがコーディネーターの方に連絡をとろうと学校に連絡したら、電話口に出られた教員が誰のことかわからなかったという報告もありました。学校には校内だけでは解決しない問題も多いと感じています。支援チームを立ち上げ、各学校の相談にのるというシステムがありますが、500校を超える学校に1チームだけでは、1年に1校づつも回れません。依頼があったら行くという体制では、現場で問題が山積するだけでなく、声もあげられない、理解もないといった方々の解決にはつながりません。市内で起こった校内虐待のケースも、そういった声なき声に耳を傾ける場がなかったことが原因のひとつなのではないでしょうか。できれば「御用聞きに伺う」くらいの体制で、その学校に合った、またその地域特性に合った、そして個人に合った支援を行う姿勢がほしいと思います。その意味でも、地域の子育て団体やNPOなどの外部との連携も不可欠で、子どもをひとつの方向から見ない、他方面からのアプローチが必要だと思います。

（８）教員の学びの確保

A市での教員の研修内容は、充実したメニューがあると聞いたことがあります。では、なぜこんなに充実した内容を用意しているにも関わらず、教職員の専門性などについて、毎年保護者から課題としてあがるのでしょうか。確かに教職員には、子どもたちの人格に働きかけるために幅の広い力が必要です。大切なことは、子どもから学び、共に成長して自分自身を変えていける先生であってくることだと思います。多岐にわたる障がいのある子どもを的確に理解する力、豊かな授業を行う力、保護者の願いを受けとめる力、そして地域と協力して条件整備をすすめる力などが求められるはずです。こうした学校の専門性と教員の資質を高めるためには、教育と研究活動の自由を保障し、研修を励まし、促進されることも必要だと思います。またこういった研修の機会を充分保証できるように、教員配置にも余裕があることが大切だと思います。

（９）評価体制の整備

教育現場に対して外部から意見を入れる機会が本当に少ないと思います。実際に横浜市内の学校で行われているスクールミーティングのような場は、自治会とのつなぎ役程度の役割が多く（これももちろん大事なことです）、息子の学校でも、その学校が抱える問題点などがその場に議題としてあがることはありませんでした。また横浜市内で最近行われ始めた「学校評価アンケート」なども、それに答える保護者側がどれだけ学校のことを知り、そして意識があるのかが問われることになります。しかしこちらから何もしなければ、一般の保護者が自分の子どもに無関係と感じている特別支援教育に意識が向くはずありません。息子が在籍する学校では、残念なことにその学校評価アンケートに特別支援教育に関する項目はひとつもありません。こういった各学校への特別支援教育に対する取り組みや、

個別の教育支援計画に対する評価を誰が行い、アドバイスを受けられるのかなども検討しなければならないと思います。個別の教育支援計画においても、学校や教職員によっては、個々の判断によって記載されることすらないケースもあります。保護者からの進言がなければ作らないということになってしまわないよう、推進評価についての体制づくりが不可欠だと思います。

2) 個別の教育支援計画に求めるもの

次に一枚のシートに考えを移してみました。子どもの理解を深め、このシートをもとに指導方法などが検討されるとき、一保護者としてこう考えてほしいと思うことをまとめてみました。

(1) できないことをできるようにすること？

A市のモデルケースにあった特別支援教育個人シートという資料を見て、親としてドキッとさせられてしまいました。それは現在の状況の中に「できない」という項目が数多くあったからです。理解できない、意思表示ができない、話をすることができない、計算できない、書くことができない、使うことができない…。一人のシートの中にこれだけの「できない」があることを、あらためて文字になって見たときに、親としてこれをどう受けとめるかは、正直難しいと感じました。行動面においても覚えられない、待てない、聞けない、表情が貧しい…。親として自分の子どもにできないことがたくさんあることはわかっていても、見方を変えてしまえば、自分の子育てを否定されたような気持ちになる人もいるのではないのでしょうか。私自身も親として、普通学級で学ぶ子どもを見ていて、みんなと同じようにできない、学べないという場面をみて、わかってはいても悲しいと感じることが多くありました。自宅で宿題をいっしょに行っているときも、これもできない、これも上手にできない、何度やってもできないことがあることに、ショックを受けたこともあります。親が自分の子どもの現状をしっかりと理解すること、そして教師がその子の現状を把握することは大切なことですが、その際の資料にこれだけのできないが並ぶことに、抵抗を感じてしまったのは事実です。今まで親として何をやってきたのか、障がいがあるために子どもに「〇〇ができない」ということがあることはわかってはいるが、こんなにもできない子どもを育てているということを感じたときに、さらにもう一度気持ちを奮い立たせることは逆に難しいのでは…と思いました。そして結局、「できない」と書かれた子どもたちの目標は、ほとんどが「〇〇できるようになる」となります。実際に、私は以前息子のこういった報告書を見て、この「できるようになる」ということばに苦しめられてしまった経験があります。中には、何ヶ月たっても何年たっても変わらないところもあり、できるようにならない子どもに親子ともに疲れてしまうのです。この目標に苦しめられてしまうのです。そして記述した立場になれば、数ヶ月後に「できるようになる」と書かなければならないプレッシャーから、細かな達成の目安を書くようになります。縄跳びの飛べる回数が何回から何回になったとか、座れる時間が何分から何分になったとか。そうしないと、その期間、何を教師がやってきたのかの評価ができなくなるわけです。そうなってしまったとき、教師は本当に子ども自身を見て、必要な教育をしていると言いつづけられるのでしょうか。しかしただ漠然と、「縄跳びが好きになる」と書いたのでは、目標達成した証拠にはならないのかもしれないかもしれません。個別の教育支援計画の難しいところはそういったところにあるのだと思います。

(2) 変わらなければならないのは子どもだけ？

個別の教育支援計画をつくった上で、子どもに対する指導目標がたった場合、本当にその対象となるのは子どもだけなのかどうかを考えてほしいと思います。子どもに何かをさせる前に、子どもへの視点を変えるなど周りの大人たちの行動や、子どもを取り巻く環境を変えることが大切だということも多いのではないかと思います。「〇〇できない」という現在の状況は、教職員や保護者などにも言えること

もあるのではないかとということなのです。たとえば「意思表示ができない」という現状があるとすれば、伝えるだけの問題ではなく、伝えようとしている受け手の問題もあるのではということを感じるのです。例えば、「時間をかけて待つようにする」とか「大人が視線を合わせるようにする」とかが必要だと思います。息子の学校の例ですが、あいさつをきちんとしましょうという目標をかかげ、子どもたちに教育指導しているにも関わらず、校門ですれ違っても挨拶もしない教員が実はたくさんいました。また年に一度「おこさあご週間」といった挨拶運動を行う期間があり、この期間には朝登校時に子どもたちが校門にたち、私から見れば意味もなく必要以上に大きな声をだし、選挙活動のように子どもたちが「おはよう」と声を張り上げます。そしてその期間が終わってしまえば、その後は何事もなかったように挨拶もせず校門を入っていく子どもたちを見るたびに、その指導にどんな意味があるのだろうと考えてしまいます。もし子どもたちにしっかり挨拶の習慣を身につけさせようとするならば、地域住民や教職員、そして保護者が日頃から挨拶を口にしていなければ、それが日常目や耳にしているものでなければ意味がないことだと思います。そういう意味でも、子どもたち自身は絶対に変わる力を持っています。私たちがお手本になっていく姿勢がなければ、子どもたちに身につく教育になっていかないのではないのでしょうか。個別の教育支援計画もその視点が大切だと思います。

（３）24時間365日の視点で

子どもは教育の時間だけ取り出されて、学校という場で生活をしています。その時間は一日約7時間。24時間のうちの1／3にもなりません。そして学校で学んだことは、家庭や地域で生かされるものでなければならぬと思います。一日24時間を円グラフにおとし、地域でどんな資源を利用しているか、そしてどんな人々が関わっているか、どんな福祉サービスを利用しているかなど、校外での情報をしっかり個別の教育支援計画に落とし込み、その上で必要な教育を組み立てて欲しいと思います。そして足りない部分は保護者と相談し、必要であれば積極的に他機関と連携するなど、教育目標がひとつの教室で行われないう、その子の一日一年をとともに作り上げていくような計画であってほしいと思います。

（４）マニュアルは必要？

私は子育てにはマニュアルはないと考えています。ましてや障がいのある子どもの育ちに合うマニュアルなど存在するのでしょうか。そう考える理由には、以前息子に障がいがあるとわかったときに、子どもの障がいに関する本ばかりを読みあさった時期があったからです。何かあれば子どもを見ずに本を見てしまう…、そうすると本に書いていないことを子どもが行えば、途端に不安になるのです。子育てが間違っているのではないか、自分のやり方が違うのか、または子どもに別の特性があるのでは…、そんなことばかり考えてしまい、本のとおりには食事ができたり、本のとおりには一日が過ごせたりすることで、安心したりするのです。しかしそれは自分の自己満足だけに終わってしまい、本当にその日子どもが笑って過ごせていたのか、子どもにとっていい時間だったのかを振り返ることもありませんでした。ようするに子ども自身をよく見ていなかったということになります。個別の教育支援計画がいったい誰のものであるかという話につながると思うのですが、障がいのある子の毎日は、生活環境に大きく左右されるものも多く、また「障がい」に対する考えや捉え方も、家庭によってさまざまだと思います。その中で、通り一遍等なマニュアルをもとに個別の教育支援計画をつくられたとしても、じっくりくるものではないかもしれません。教員のためになっても、子どものためになるかどうかは疑問です。こうつくべきというものは、子どもが教えてくれるものではないのでしょうか。枠にとらわれたり、書かなければならない項目に必要以上に縛られてしまうと、前述にもあるように、その計画に苦しめられてしまうことにつながるかと心配します。もともと障がいのある子どもたちは枠にとらわれることが苦手なのではないのでしょうか。

3) 特別支援教育への期待

私個人としては、特別支援教育がすべての子どもたちにとって充実した学校生活を送るための大きな柱となってほしいと願っています。障がいのある子どもを中心とした一部のものになるのではなく、教育全体に対する考え方を示すものとして機能してほしいと思っています。そのために、以下のことを考えてみました。

(1) 通常の枠を広げる

特別支援教育とは通常の枠を広げること。ということばを伺ったとき、とても共感できました。私たちは「特別」ということばを使うと、どうしても取り出すという感覚につながってしまいます。「特別」となった瞬間に、普通とは違うわけですから、一般の保護者も教員も地域も、自分の問題として考えられなくなってしまうのではないのでしょうか。常に通常の枠の中に入っていることで、みんながそのことについて考え、みんながみんなの問題として向き合うことになります。特別な配慮が必要なお子さんでも、いろんな人の見方考え方でみんなと同じ場所で過ごすことができると思います。また個人的な場が必要なときには、それは取り出すのではなく、個に応じた配慮だと周りが認識することが大切だと思うのです。息子の障がいは重いですが、普通学級で過ごす彼は本当に楽しそうです。そして周りの子どもたちは、息子の障がいを彼が持っている「個性」と感じていると思います。そこには自然に配慮が生まれ、作業をするときにはみんなが彼の周りに集まり、手が動かないときには誰かが手を添えてくれます。彼が発言するときには、聞き取りづらいことをわかっているのでみんなが静かになります。そして近くにいる子どもが通訳をします。この場で彼が共に過ごすことが「当然」なのです。そうすると、個別に学習する時間も、みんなは彼にとって必要な時間と自然にとらえることができます。個別の教育支援計画をどこで誰が行うのか、この教育は何のために行っているのかをもう一度考えていただき、「通常」のこととして行える可能性を広げてほしいと思います。

(2) 保護者に必要な努力

私が実際に保護者から伺ったことばの中に「先生との間に波風をたてたくない」「先生に嫌われたら困る」「先生に意見を言うことで子どもに対する態度が変わったら困る」「学校で先生と接するのは子どもなので、できればものわりのいい親と思われたい」「他の保護者の手前、自分の子どものことだけを言うわけにはいかない」という内容のものが 있습니다。特別支援教育をすすめるためには、学校も保護者も“子どものために”という視点をまずは確認し、その子にとってどう考えることが最善策なのかを、共に時間をかけて話し合う“癖”をつけることが必要だと思います。互いに経験も違えば立場も違います。考え方が違うのは当然のことなので、まずは話し合う時間を持ち、自分の意見を素直に言い、具体的な方法を提示し、そして実践し、また見直していくことの繰り返しの様な気もしています。個性豊かな子どもたちを前にして、適当なマニュアルを見つけることの方が難しいと思います。その上で、保護者は小さなことだと思っても見逃さず、その都度、学校に意見を言うことを心がけることも必要だと思います。

(3) 特別支援教育はすべての子どものために

私は息子の送迎等で、他の保護者よりも学校に足を運ぶ機会も多く、実際に教室に入って普段の様子を見ることもあります。ノーマライゼーションの理念に基づくならば、本来一人一人の教育的ニーズは、「すべての子どもたち」が対象となるはずですが、言い方を変えれば一人一人のニーズに応じた教育は、障がいのあるなしに関係なくすべての子どもたちが必要としています。担任が一人一人の子どもとしっかりと向き合い、学校にいる時間だけでなく、その子の生活についても保護者とともに考えられる時間を持つことが、本当に必要だと思います。学級王国と言われる教育現場は、自分のクラス以外のこ

とに意見を言えるような仕組みは校内には少ないと思います。私が以前訪問したことのある学校では、個別支援学級のことを他の教職員はまったく無関心で、職員室でも担当教諭は隅の席に座り、保護者の話では職員間のやりとりもないという例がありました。「障がいのある子どもは自分がみるものではない」とはっきり口にする教員もいます。何か問題が浮き彫りになってからでは遅い場面も多く、日頃から小さなことでも話し合える状況があれば、子どもたちも保護者も安心して子どもを学校に通わせることができるのではないのでしょうか。そして教員にも保護者にも、悩むことにぶつかったときに、校内にも、そして校外にも必要に応じて相談できる機関があることで、客観的な視点で問題解決ができるようになることが、この特別支援教育を支える上で必要なことだと思います。特別支援教育が個人の問題ではなく、将来を生きる子どもたち一人一人の人生において有効な取り組みとなるよう、大きな（広い）視点、暖かい視点、そして深い視点で、子どもを取り巻くいろいろな人たちが関わりつくっていけるものになることを期待したいと思います。

最後に、私どもの法人のスタッフが、お子さんとの時間を過ごすときに大切にしていることをご紹介します。若いスタッフが全身で子どもたちと向き合い、以下のことを大切に活動を行っています。

- ・子どもたちが障がいにとらわれることなく、その子の暮らす街で自分らしく生きることをお手伝いすること
- ・子どもはそもそもみな一人一人違う。「障がい」の前に、子ども自身を見ること
- ・完璧な支援を目指すのではなく、常に本人、家族とともに考える姿勢を持つこと
- ・何をどれだけやったかではなく、その子に合った活動をベースに、楽しい時間を共有できているかどうかを大切に考えること
- ・子どもを変えようとしなない。子どものせいにしない。障がいのせいにしない。まずは私たちが変わる
- こと
- ・治す、変えることにとらわれず、自分らしく、その子らしくを大切にすること
- ・100人の専門家を増やすよりも、理解ある100人のコンビニの店員さんを増やすことを考えること
- ・特定の型に子どもをあてはめず、一人一人の生活のあり方を見て対応すること
- ・子どもを過ごす時間にマニュアルはない
- ・子どもに何かをさせるのではなく、子どもが何をしているか、何に興味をもっているかを見つけること
- ・子どもたちにとっては、多様な人材が関わり、多様なアプローチが必要。誉め方や伝え方もいろいろあっていい
- ・私たちのペース（見方）では子どもは動かない、育たない
- ・子どもの「個性」が育つように願う。そして私たちも子どもたちと過ごすことによってより育っていくことを自覚すること
- ・子ども自身が「生きる力」を育てられるような関係を持つこと
- ・まずは私たちがその子に認められる大人になること

もちろん私たちは教育者でもなく指導者でもありません。教育現場には合わないと言われてしまえばそれまでですが、共通する部分もあるのではないのでしょうか。私たちはこのことを大切に活動することで、何か胸につかえていたものがとれた気がしています。そして非常に楽な気持ちで、お子さんと向き合うことができます。実際に人生を生きていくのは子どもたちです。その貴重な時間をいっしょに過ごす第三者として、共にお子さんの成長を感じることができればと思っています。そして家族以外に子どものことを真剣に考えてくれる人たちとの出会いが、保護者としては本当に大切なのだと実感しています。